人文科教育研究　22　1995年　pp.23－32

「ごんぎつね」の視点と語り

山　本　茂　喜

はじめに

「ごんぎつね」（新美南吉）の視点，ことに最後の場面，六節の一文，「兵十はかけよってきました。」の視点の解釈をめぐっては，西郷竹彦の提言以来，いくつかの論議がなされてきた。

この「ごんぎつね」の視点をめぐる論議は，単なる「ごんぎつね」の一文の視点を確定しようとする論争というよりも，むしろ従来の，いわゆるニュー・クリティズム・分析批評における人称視点論，また西郷視点論の問題点を露呈している点に意義があると思われる。

近年の，いわゆる物語論の分野においては，ジュネットをはじめ，シュタンツェル，チャットマンらによって，従来の人称視点論の批判に立つ新たな視点論が展開されている。その知見には，この「ごんぎつね」の視点論争に示唆を与える点が多い。そこから従来の国語教育における視点論の欠陥も浮かび上がってくるものと思われる。

そこで本稿では，それら物語論における視点論の内，主としてシュタンツェルの理論によりながら，「ごんぎつね」の視点について考察したいと思う。

1．論点の整理

この論議のきっかけとなったのは，西郷竹彦の『教師のための文芸学入門』（昭和四三年）における次のような記述である。

> しかし，この（28）にきて，「そのとき兵十は，ふと顔をあげ…」から，視角を兵十に，〈きりかえ〉たのです。これを視角の転換といいます[1]。
>
> ここのところは，兵十の視点からのところですから，つぎのようにすべきです。
>
> 「兵十は，かけよって，いきました」
>
> あるいは，「兵十はかけよりました」とすべきです。いや，そうした方がいいだろうと思うのです[2]。

このように西郷は，六節が兵十の視点から描かれていること（「視角の転換」）を指摘し，それに対して「兵十はかけよってきました」が兵十の視点からの文ではないことを問題として，その訂正を提案したのである。

これに対していくつかの批判が寄せられたが，その多くは西郷の，視点論によって本文を恣意的に改訂しようとする姿勢に対する批判か，もしくは，読者あるいは作者にとっては「兵十はかけよってきました」も不自然ではない，とする意見が中心であった。この点で最も整合性のある

説明をしているのは，長尾高明である。

ただし，「ごんは，ぱたりとたおれました」という描写で，読み手ははっとして，ごんのほうに意識が行くであろう。作者も，ごんの姿を描いた勢いで視点が兵十から離れてしまった（物語的視点が入り込んだ）のである。このような視点の揺れは，小説技法から言えば幼いと批評されるかもしれぬ。事実，新美南吉はその程度の作家であろう。しかし重要なのは，その揺れが作品の大きな欠点かといえばそうではないということである。先程も述べたように，読み手にとってそれは不自然には感じられないはずである[3]。

一方，先に見たように西郷の論は，六節から兵十の視点で描かれるという「視角の転換」が前提となっている。したがって，西郷に対する反論として，六節が兵十の視点からのみ描かれているわけではない，とする主張がある。それは大別すると，ごんの視点が入り込んでいるとする論，客観視点的とする論，そしてテクスト全体が全知視点とする論，となる。

まず，ごんの視点が入り込んでいるとする論である。藤井國彦は次のように述べている。

この第一文（「ごんは，バタリとたおれました。」―引用者注）は，兵十の眼とも読み取れる。大方の読みがそうである。しかし，わたしは，ここから話者の視点は転換したとみる。「ごんは，ぱたりとたおれました。」という叙述を，兵十の側にある話者の眼からの叙述とみないで，ごんの側で，ごんのすぐそばに寄り添う話者の眼とみるのである。すると，第二文の「兵十はかけよってきました」も別に問題にならない。（中略）ここでは，話者も，読者もごんに同化する，つまり，ごんの心の中に入ってしまっている全知視点であると考えれば，「兵十はかけよってきました」の表現は成立すると思う。それでこそ，主題に対する感動も盛り上がるのである[4]。

この論について鶴田清司は，「特に〈兵十はかけよってきました。うちの中を見ると，土間にくりが固めて置いてあるのが，目につきました〉において，第一文が「ごんに寄り添う眼」で，第二文が「兵十の眼」というのはやはり不自然である。…この問題に対する明快で納得のいく説明は難しい。」と疑問を呈している。そして，藤井のように，「「話者」がそこだけ〈ごん〉の側（近く）から語っていると考えるのが最も合理的である。不自然さは残るが，「視点論」（作品ないし話者の視点）のレベルで考えると仕方ないだろう。」と結論づけている[5]。

一方，井関義久は次のように述べている。

話主は，兵十の側に立って兵十の気持ちを語るように見せながら，実は兵十の心の中にまで入り込むことを避けた。当然，ごんの心の中にも入っていないから，判断のすべては読者に任されることになる。一の場面にも増して，結末は客観視点的に語られているのだ。

しかし，このように六節が客観視点的に語られている，ということを主張するためには，「こないだ，うなぎをぬすみやがったあのごんぎつねめが，またいたづらをしにきたな。」という文が問題となる。この点について井関は次のように述べる。

あえて言えば，「…またいたづらをしにきたな，と思ったのでしょう。」と言うべきところを省略したと考えても誤りではなかろう。とすれば，これは話主が想像したことであって，兵

十が思ったことにはならなくなってしまう[6]。

しかし，この論は，いわゆる「自由間接話法」に対する誤解に基づく強引な論と言わざるをえない。この点については後述する。

一方，望月善次は，「ごんぎつね」のテクスト全体が全知視点であり，「視角転換」説そのものが成り立たない，として否定する[7]。望月が全知視点とする根拠の一つは，語り手が加助の心の中にも入っている点である。

加助は，ごんには気がつかないで，そのままさっさとあるきました。

また，六節以前にも兵十の心の中に入っている点をあげる。

兵十は，ご飯をたべかけて，茶わんをもったまま，ぼんやりと考えこんでいました。

兵十はびっくりして，加助の顔を見ました。

そして全知視点とする立場から，「ごんは，バタリとたおれました。兵十はかけよってきました。」はごんの視点，「家の中を見ると…」は兵十の視点，というように入れ替わるのは当然だ，とするのである。この点は藤井國彦の主張と同一である。したがって望月説においても，鶴田清司の指摘する不自然さはなお残されていると言えるだろう。

2．シュタンツェルの「物語り状況」論

以上のように，この「ごんぎつね」の一文の視点をめぐっては，様々な論が提出されているが，いまだその構造を明確には説明しえていないと言えるだろう。従来の論は，おしなべて人称視点論に基づくものであり，しかも西郷視点論に対する根本的な批判もなされていない。

ここでは，主としてシュタンツェルの理論に基づき，検討したいと思う。

シュタンツェルの物語理論を形成する中心概念として，「物語り状況」がある。

シュタンツェルは，「語りの媒介性を形成する」[8]「典型的な《物語り状況》」として，次の三つの基本型をあげている。すなわち，《「私」の語る物語り状況》《局外の［全知の］語り手による物語り状況》《作中人物に反映する物語り状況》，の三つである。《「私」の語る物語り状況》とは，いわゆる一人称小説の語りを指す。《局外の［全知の］語り手による物語り状況》とは，いわゆる三人称小説における語りである。そして，《作中人物に反映する物語り状況》では，局外の語り手のかわりに，「映し手」が現れる。この場合，映し手たる作中人物の意識を通して，物語の世界が映し出されることになる。

シュタンツェルは，語り手と映し手とによって，「典型的な物語り状況」の第一の構成要素である，物語の「叙法」が形成される，としている。（他の構成要素として，「人称」と「遠近法」がある。）注意すべきは，これらの構成要素が実現する形態は，「形態の連続体」として表されることである。すなわち，例えば叙法であれば，語り手と映し手を両極として，実際の形態は，その間を「段階的かつ連続的に隙間なく満たしている」[9]のである。しかも，ある一つの小説における物語り状況は，決して一つに固定したものではなく，章ごと，あるいは段落ごとに変化していく。

この様な状態をシュタンツェルは，「《物語り状況》の動態化」[10]と呼ぶのである。

3．「ごんぎつね」の分析

3－1．局外の語り手による物語り状況

さて，以上のようなシュタンツェルの物語理論をふまえて，「ごんぎつね」を分析することにしよう。（テクストは光村図書平成五年度版の国語教科書による。）

「ごんぎつね」は，次の一文から始まる。

これは，わたしが小さいときに，村の茂平というおじいさんから聞いたお話です。

冒頭から，「わたし」という語り手が登場する。明らかに人格化された語り手である。「ごんぎつね」は，「わたし」という人格化された語り手が語る物語なのである。ただし，その背後には「茂平」という本来の語り手が存在しているのであり，「わたし」は聴き手でもあるのだが，これはむしろ草稿（「権狐「赤い鳥に投ず」」『スパルタノート』昭和六年九月）の名残ともいうべきものとなっている。草稿では，「若衆倉の前」という語りの場も設定され，ジュネットのいう「メタ物語世界」を形成している。「ごんぎつね」という物語は，本来ならば二重の媒介者による物語なのである。

しかし，定稿では大きく削除され，「茂平」という語り手はこの一文にしか登場しない。ことに草稿では，茂平と兵十との同一性が暗示されていると読む読者もいるが，定稿では，そのような要素は消滅している。したがって，「わたし」という語り手は，ごんや兵十の住む物語世界とは別の次元に存在していると言うことができる。シュタンツェルの「「私」の語る物語り状況」とは，媒介者たる「私」が，登場人物と同じ虚構の世界に存在することを言う。しかし，ごんぎつねの語り手たる「わたし」は，作中人物の住む物語世界とは異なる世界に存在する。それは，「いわば物語の虚構世界と読者の属する現実世界との境目」[11]である。したがって，「ごんぎつね」は，シュタンツェルの言う「局外の語り手による物語り状況」に相当すると言うことができる。

さて，冒頭の一文からも明白なように，この語り手は人格化された存在であり，独立した思考を持ち，随所でその判断を示す。例えば，次のような箇所である。

ごんは，<u>ひとりぼっちの小ぎつね</u>で，しだのいっぱいしげった森の中に，あなをほって住んでいました。（傍線は引用者。以下同じ。）

ここでは，語り手が，ごんぎつねを「ひとりぼっちの小ぎつね」である，と判断しているわけである。

このように，「ごんぎつね」は，「局外の人格化された語り手による物語状況」を基本的に持つ物語であることは明白である。なお，この場合，確認しておくべきは，この語り手が「全知」であるかどうかである。この語り手が，ごんの心中に入り込んでいることは，もとより明白であろう。問題は，兵十の心中に入っているかどうかである。この点については，前節で見たように，井関義久の論がある。六節における次の文である。

そのとき兵十は，ふと顔を上げました。と，きつねがうちのなかへ入ったではありませんか。
こないだ，うなぎをぬすみやがったあのごんぎつねめが，またいたずらをしに来たな。

ここでは，語り手が徐々に兵十と一体化していると見ることができる。「と，きつねが…」の文は，語り手による語りの部分であるが，語り手は兵十の立場からその心中を代弁している。「きつねが」という言い方にそれがよくあらわれている。そして最後の一文では，語り手の視点と作中人物の視点とが完全に重なった，いわゆる「自由間接話法」をとる。語り手は兵十になりきって，その心中を語っているのである。敬体から常体への変化にもそれがあらわれている。この点，井関義久のいう“客観視点的”というのは当たらない。井関のいう「思考語」(「思いました」等)を使う表現よりも，さらに兵十に密着し，兵十に成り代わって語っているのである。

では，語り手は，ごんや兵十以外の人物の心中をも知り得る立場にあるのだろうか。次の文を見てみよう。

加助は，ごんには気がつかないで，そのままさっさと歩きました。

これは前節で取り上げた望月善次の「全知視点説」の根拠となっているところである。これが望月の言うように，語り手が加助の心中にまで入り込んでいるかどうかは，微妙な表現といわざるを得ない。だが，語り手が加助の心中についての判断を示していることは間違いない。

しかし，これはごんや兵十の場合のように，映し手として，その知覚や意識を通して光景や他の人物が描写される，という場合とはレベルが異なる。この相違は，テクストの解釈上，重要な違いである。

チャットマンは，従来の視点（point of view）のかわりに，次の三つの用語を提案している[12]。すなわち，slant，filter，interest-focus，の三つである。このうち，slant とは，簡潔に言えば「語り手の態度」を指す。そして filter とは，シュタンツェルの言うところの映し手である，作中人物の意識をフィルターとして濾過して描かれることを言う。そして interest-focus とは，読者がその人物の「利害関係」に関心を寄せ，その人物に共感を持ち，その立場で読み進めるような，登場人物への焦点化を言う。

このチャットマンの視点論で言うならば，加助に対する語り手の焦点化は，slant と言うべきものであり，ごんや兵十のフィルターとしての焦点化とは性格が異なるものと言うべきだろう。

3－2．局外の語り手によりつつ・作中人物に反映する物語り状況へ

さて，このように，「ごんぎつね」における「局外の語り手」は，「全知」に近い存在であると言えるだろう。ただし，「ごんぎつね」は，終始一貫して「局外の語り手による物語り状況」をとる訳ではない。

この冒頭部では，いわば物語行為そのものが主題化されている。しかし，人格化された語り手は，徐々に後退していく。「その中山から…いろんなことをしました。」の段落では，まだ人格化された語り手による語りが優勢だが，「ある秋のことでした。」から，ごんという映し手による物語り状況へと移行していくのである。

ある秋のことでした。二，三日雨がふり続いたその間，ごんは，外へも出られなくて，あなの中にしゃがんでいました。

この場面から，語り手は，ごんに焦点をあて，ごんに沿った視点で語り始める。

ただし，しばらくはチャットマンの言う，interest-focus としての語りが続き，ごんの立場から描かれていく。

雨が上がると，ごんは，ほっとしてあなからはい出ました。そらはからっと晴れていて，もずの声がキンキンひびいていました。

ここでは，風景がごんの視点から描かれることによって，ごんの心理を表すものとなっている。ごんによって主観化された風景が描出されているのである。

川は，いつもは水が少ないのですが，三日もの雨で，水がどっとましていました。ただのときはみずにつかることのない，川べりのすすきやはぎのかぶが，黄色くにごった水に横だおしになって，もまれています。

ここでは，コンテクスト全体がごんの視点から描かれるように変化しているために，傍線部も，語り手の判断と，ごんの思考とが二重重ねになっているかのような印象を与える。

ふと見ると，川の中に人がいて，何かやっています。ごんは，見つからないようにそうっと草の深い所へ歩きよって，そこからじっとのぞいてみました。

「兵十だな。」と，ごんは思いました。

この場面では，文字どおりの意味で，ごんの視点から描かれている。ごんの知覚や意識をフィルターとして，他の人物や情景が映し出される。このような物語状況を，「作中人物に反映する物語り状況」と言う。そして，ごんのように，語り手に「視点を仮託された人物」を，「映し手」と言うのである。

「ごんぎつね」は，このようなごんを映し手とする「物語り状況」が五節まで続く。この間，全知としての語り手は退き，語り手はその全知性を薄め，例えば，次のような記述が見られるようになる。

兵十は，それから，びくを持って川から上がり，びくを土手に置いといて，何をさがしにか，川上の方へかけていきました。

ここでは，明らかに，ごんを視点とすることによる情報の制限が見られる。

しかし，完全に「作中人物に反映する物語り状況」に移行するわけではない。局外の語り手は，やはり随所に顔を出す。すなわち，語り手と映し手とが重層的に現れる語りの構造をとるのである。

次の記述は，問題の「兵十はかけよってきました。」の一文と関わって，注目すべき文である。

ごんは，そのまま横っ飛びに飛び出して，一生けんめいににげていきました。

ごんの視点から描かれているのであれば，傍線部は，「にげました」になるべきであろう。「兵十はかけよってきました。」と同じ構造を持つ文である。ここで，「にげていきました」とあるのは，明らかに，局外の語り手からの語りのあらわれである。ここで語り手は，「にげていく」ごんの後

ろ姿をイメージしながら，物語りを語っている。いわば，ごんの姿を外側から描く「外的遠近法」で語っているのである。

しかも，次の文では一転して，ごんをフィルターとする視点からの記述となる。

ほらあなの近くのはんの木の下でふり返ってみましたが，兵十は追っかけては来ませんでした。

語り手の意識がごんにあるため，次の一文でごんをフィルターとする視点に変わっても読者にとっては不自然ではないのである。

このように，この「ごんぎつね」というテクストは，「局外の語り手による物語り状況」と「作中人物に反映する物語り状況」とが，一文ごとにも交替するようなテクストとなっていることに注意しなければならない。

厳密に言えば，「作中人物に反映する物語り状況」に移行しても，その背後には常に「局外の語り手による物語り状況」が存在する。すなわち，ごんや兵十の視点から知覚された描写がなされても，その描写からは，「局外の語り手」の声も聞き取れることに注意しなければならない。すなわち，「ごんぎつね」は，「二十世紀中葉における小説の語りの基準」(13)とされる，「《局外の語り手によりつつ・かつ作中人物に反映する物語り状況》」と言うことができる。

以上のように，この物語は，「局外の語り手による物語り状況」で始まり，「わたし」という語り手は徐々に後退し，そして，「局外の語り手によりつつ・かつ作中人物に反映する物語り状況」へと移行していくのである。（このように，「局外の語り手による」語りから「作中人物に反映する」語りへ，物語の提示部から主要部への移行時に変化するのは，非常にしばしば観察される現象であり，一種の「形式主義化」とされるところである(14)。）

3－3．六節の分析

さて，以上のように，「ごんぎつね」の基本的な「物語り状況」を「局外の語り手によりつつ・作中人物に反映する物語り状況」として捉えるならば，問題の六節はどのように考えることができるだろうか。

aそのとき兵十は，ふと顔を上げました。bと，きつねがうちの中へ入ったではありませんか。cこないだ，うなぎをぬすみやがったあのごんぎつねめが，またいたずらをしに来たな。（記号は引用者。以下同じ。）

このaの文から，視点は兵十に転換している。ただし先述したように，bの文では，「きつね」という言い方に語り手の兵十への接近が表れてはいるものの，全体としては，語り手による語りの文となっている。しかし，cでは，語り手が兵十と一体化して兵十の心情を吐露する，いわゆる「自由間接話法」をとっている。

そして，問題の次の場面である。

dそして，足音をしのばせて近よって，今，戸口を出ようとするごんを，ドンとうちました。

eごんは，バタリとたおれました。

f 兵十はかけよってきました。g うちの中を見ると，土間にくりが固めて置いてあるのが，目につきました。

d では，視点は継続して兵十に焦点化されている。ただし，きつねではなく，「ごんを」という叙述に，語り手の判断も重なっている。e になれば，はたして映し手としての兵十の知覚を濾過した情景なのか，局外の語り手による語りなのか，それを決定する根拠はない。ただ，ごんの姿を外的遠近法で描いているのである。このように，このテクストでは，局外の語り手による外的遠近法と，ごんや兵十という映し手の内的遠近法とが物語の中で重層化しているため，一つの文を映し手によるものか，語り手によるものかを決定するのは，読者にとってほとんど不可能なこととなっていることに注意しなければならない。

さて，そして問題の f である。これまでのこのテクストの物語り状況の特質から言えば，この一文は，局外の語り手による語りの部分と見ることができる。語り手の意識はごんにある。焦点は「バタリとたおれ」た，ごんの近くにある。したがって，「兵十はかけよってきました。」と語られているのである。しかし，ごんをフィルターとする視点とは言えない。語り手は倒れたごんの近くに焦点化しながら，兵十の動きを描いている。したがって，次の兵十をフィルターとする一文との接続も読者の意識の中でスムーズに行われるのである。

「兵十がかけよってきました。」とあればごんの知覚をフィルターとする情景として，あるいは，「兵十はかけよっていきました。」とあれば，兵十に寄り添った視点としての叙述としても考えられよう。しかし，無理に本文を改訂してまで，映し手による物語り状況として読みとる必要は全くないのである。

この事情は先の一文，「ごんは，…にげていきました」と同じである。このような構造を持つ文は，「ごんぎつね」というテクスト全体の性格に合致する表現と言えよう。

次に，終末の場面を検討しよう。

h「おや。」

と，兵十はびっくりして，ごんに目を落としました。

i「ごん，お前だったのか，いつも，くりをくれたのは。」

j　ごんは，ぐったりと目をつぶったまま，うなずきました。

k　兵十は，火なわじゅうをバタリと取り落としました。

l　青いけむりが，まだつつ口から細く出ていました。

h，i では，明らかに継続して兵十の視点から語られている。しかし，j になると，外的遠近法を取っているため，兵十の知覚を通したごんの描写なのか，局外の語り手による描写なのか，曖昧になってくる。

このような傾向は，k，l に続いている。k においては，すでに兵十は映し手とは言えず，外的遠近法で描写される。最後の一文，l では，兵十の目に映った情景というよりも，語り手によって焦点化され，主題化された，ごんの悲劇，無垢な魂の悲劇の換喩的，象徴的な光景となっている。「青いけむり」は，語り手によって前景化された要素である。ここには，明らかに「青いけ

むり」に象徴的意味を込めようとする語り手の声が聞き取れるのである。

4．結論

以上のように，「ごんぎつね」の物語り状況を分析することによって，問題とされてきた一文の視点の構造が明らかになるとともに，従来の西郷視点論，また，人称視点論にもとづく視点の分析の根本的な欠陥も明らかになったことと思う。

まず西郷竹彦の提言は，そもそもテクストのある場面全体を一つの視点で統一しようとすることに無理があった。視点が段落ごと，また，文ごとにも移り変わる生きたテクストを，強引に一つの視点で統一させようとする所に無理があったのである。そして，そのような論の根本には，視点と語りとの混同，同一視がある[15]。西郷は語り手を「外の目」として分離させながらも，視点と同一視することによって，視点人物の「内の目」に吸収してしまうのである。

> つまり，語り手の〈外の目〉がごんという人物の〈内の目〉に重なってきている。語り手がごんにのりうつっている。ごんになりきっている。じつは，この（4）からあと（「ある秋のことでした。」から以降ー引用者注）の文章はずっと，語り手がごんそのものになって語っているのです[16]。

その結果，問題の一文も「ごん」という視点人物に直結されてしまうために，ことさら不自然さが浮かび上がってしまうのである。

この欠陥は，藤井國彦・望月善次の論においても同様に指摘することができる。

藤井の解釈も，問題の一文を，ごんをフィルターとする視点に結びつけるために，次の兵十をフィルターとする文との接続が不自然となってしまう。その論の根本には，やはり視点と語りの混同，あるいは語りの無視がある。この一文は，ごん，兵十，どちらをフィルターにする叙述でもない。局外の語り手による語りの部分であり，外的遠近法で兵十を描いているのである。このテクストには，局外の語り手による語りが常に基層にある。ごん・兵十を映し手とする語りとともに，重層的な語りの構造になっていることに注意しなければならない。

また，全知視点の文があるからといって，視点の転換は否定できない。なぜなら，全知の語り手による語りの部分があったとしても，ある場面を映し手による語り（限定視点）が支配する部分が明らかに存在するからである。そこでは，映し手の主観によって描かれる世界が展開している。全知の語り手による語りが基層にあったとしても，映し手による，限定視点の語りの部分が重層的に現れることは，可能と言うより，むしろ一般的なことなのである。（そもそも，完全な全知視点によるテクストは全くといっていいほど存在しない。）従来のように，全知視点か限定視点か，という二者択一の分類法では，テクストの重層的で動態的な様相には十分に対応できないと言えよう。

テクスト全体，あるいはテクストのある部分が，一人の映し手によって語られている場合，様々な描かれた光景は，映し手の主観を通して描かれるため，種々の記号的な意味を持つ。読者

にとっては，その意味を読みとることが重要となる。ことにこのテクストでは，ごんと兵十をフィルターとすること，およびそのフィルターの「転換」による解釈上の意味を読みとることが重要である。しかし，従来の全知説では，このような表現効果が隠されてしまうのである。

ごんの一方的な思いこみ，そこに表れるごんの純粋さ，という，この物語の解釈にとって非常に重要な要素は，ごんを映し手とする，内的遠近法の手法（空間的な関係，あるいは知識の制限）によって生まれている。このテクストにおいては，ごんを映し手として物語られることによって，ごんの純粋で無垢な存在が強く印象づけられる。読者はそのような純粋で無垢なごんに強い共感を持つ。それが六節における視点の転換によって客観的に描かれるごんの悲劇をいっそう哀れなものと感じさせるのである。このテクストの読みに重要なのは，ごんの視点から描かれることから読みとることのできる，ごんの無垢な心と，それゆえに訪れる悲劇との間のアイロニーである。そしてそれを構成しているのが，重層的な視点と語りの構造なのである。

〈注〉

（1） 西郷竹彦『教師のための文芸学入門』明治図書，昭和43年10月，159頁

（2） 同，162頁

（3） 長尾高明『鑑賞指導のための教材研究法—分析批評の応用—』明治図書，平成２年２月，129－130頁

（4） 藤井國彦「何のために「視点」を分析するのか」『現代教育科学』378号，昭和63年５月

（5） 鶴田清司『「ごんぎつね」の〈解釈〉と〈分析〉』明治図書，平成５年９月，51－52頁

（6） 井関義久「話主が判断を避けるとき—『ごんぎつね』の場合—」『横浜国大国語研究』第５号，昭和62年３月

（7） 望月善次「「ごん狐」の「視点」—〈「視角」転換説〉を否定する—」『読書科学』第147号，平成６年４月

（8） シュタンツェル『物語の構造』前田彰一訳，岩波書店，平成元年１月，８頁

（9） 同，34頁

(10) 同，47頁

(11) 同，14頁

(12) Chatman, Seymour. (1990) Coming to Terms, Itaca: Cornell U. P, pp. 139–160

(13) 『物語の構造』，11頁

(14) 同，61頁

(15) この問題については，拙稿「「冬景色」における視点人物と語り手—「冬景色論争」と西郷視点論—」『国語教育研究の現代的視点』高森邦明先生退官記念論文集編集委員会編，東洋館出版，所収，平成６年８月，参照

(16) 『教師のための文芸学入門』，69頁